

上田市小中学校のあり方検討委員会会議録

1 日 時

平成31年1月25日（金） 午後1時30分から午後15時30分まで

2 場 所

上田駅前ビルパレオ5階 上田市教育委員会 第一会議室

3 出席者

○ 委 員

委 員 長	桜井	達雄
副 委 員 長	関	和幸
委 員	飯島	俊勝
委 員	金井	律子
委 員	菊池	秀樹
委 員	竹花	のり子
委 員	中川	智浩
委 員	中村	彰
委 員	早坂	淳
委 員	福澤	行雄

○ 教育委員会

教 育 長	峯村	秀則
-------	----	----

○ 事務局

教 育 次 長	中村	栄孝
教育総務課長	石井	正俊
学校教育課長	高木	比登彦
生涯学習・文化財課長	小林	薫
教育総務課総務企画係長	西澤	透
教育総務課教育施設整備担当係長	平田	佳久

1 開 会

2 人事通知書の交付

3 教育長あいさつ

4 委員自己紹介

5 事務局自己紹介

6 委員長・副委員長の選出

7 上田市小中学校のあり方の検討について（事務局説明）

（1）検討員会設置の趣旨

（2）今後の検討の進め方について

（3）上田市小中学校のあり方研究懇話会 提言書について

（「新しい時代に向けた『上田市小中学校のあり方』の検討について」）

8 質疑・意見交換

【竹花委員】

タイムテーブルについて、H32年度以降に中学校区単位の地域で学校の議論をする話だったが、例えば具体的に個別的名称を出す話が出ないとすると、市内全ての中学校区単位でやっていくことなのか。それとも課題があるところに絞っていくのか。

【石井教育総務課長】

具体的なことについてはこれからのことになる。基本的には全ての中学校区でやっていただくと思う。

【竹花委員】

そのほかに、附属資料の1ページの年度別児童数に西内小はH30からH34年度までは5クラス、H35年、36年は6クラス24人になっているが。

【石井教育総務課長】

5クラスというのは、1学年1クラスなら6クラスになるところだが、今現在複式学級により5クラスである。H35年度についてその年度は複式に該当しないということで解消となっている。

【早坂委員】

タイムテーブルのスケジュールのH32年度以降についてお願いがある。H31年度にあり方検討委員会の方針を確定し、H32年度は中学校区単位における検討となるが、その下に【説明会・懇談会などの開催】と記載されている。この2年間、われわれの会議での検討結果が中学校区単位

でトップダウンに降りてしまうイメージがある。上田市のあらゆる人が発言して当事者意識を持ち、自分のこととして市政を捉えていかないと、減少していく社会は回っていかないと。会議で決めたことをそのまま降ろすよりはそこをきっかけにしながら、中学校単位、市民の皆さまを巻き込んだ議論ができればいいと思う。

【中村教育次長】

あくまでもこの2年間については、上田市全体としてどういう教育が望ましいか、あるいは学校が望ましいのか議論されると思う。当然、各地域でそれぞれの実情が違ふことで、H32年度以降は中学校区単位の方へ出向くなどして、その地域の学校方針を踏まえて議論する場だと思っている。ただ、基本方針どおりに全てが均一ではなく、基本方針を踏まえながらその各地域をどうしていくかという懇談会にしたいと考えている。

【福澤委員】

検討する内容から外れてしまうかもしれないが、今日の新聞にも外国籍児童生徒について掲載されていたが、上田市には200人以上の外国籍児童がいて1つの学校ぐらいの人数になる。一中には30人位いて、まずは日本国籍の子の教育のあり方を検討することは当然だが、少なからず外国籍の児童生徒が上田市にいて、その子たちがいるから学級数を維持している部分が学校によってはある。本校でも学校現場の対応には非常に難しい部分がある。いくつかの学校に限られるわけだが、そういった面も頭において議論していただきたい。

【桜井委員長】

ここでの大事な視点だと思う。社会の変化に合わせた教育のあり方を考えることを、提言書2ページの（兵庫県のまちづくり基本方針より）、多様性、人と人とのきずな、結びつきを考える視点が大事である。

【中村委員】

資料1ページの「◆ソフト・ハード両面からの～」はソフトの中で今の外国籍の方と似た部分があり、今の教育制度から考えると相違する部分があるかもしれない。地域で言えば、例えば人権教育を上田市は生涯学習の一環で公民館、分館で行っている。しかし地域でやっても出席する方は役員だけと言っても過言ではない。これからの社会を考えると、今以上に人権という観点は多様性を含めて大事になると思う。今後、外国籍、障がいの子を含めて生まれ育った地域で同年代の子どもと一緒に過ごすことが大事である。特に現場の先生方は大変なご苦労があると思う。30年、50年先を見据えながら、学校のハード面で言えば、例えば空き教室の使い方がいろいろとあると思うということも含めてこの場で大きな議論をさせていただきたい。

【峯村教育長】

外国籍、障がいのある児童生徒を地域で育てるといふ、大変大事な視点のご指摘をいただいた。外国籍児童は本来、日本の学校の就学義務はない。しかし、学校で一緒に学び、いろいろと身に付

けたい子どもの切なる思いや保護者の皆さんの考えがある。人道的な立場に立って学校として受け入れていただくことが大事だと思う。今後上田市ではますます外国籍のお子さんが増えてくるのではないかという予想がある。また、障がいのある児童生徒を地域で支えるということは、インクルーシブ教育の大事な視点である。そういう視点でぜひ検討いただきたい。

【桜井委員長】

現在抱えている大きな課題だと思う。この会議の中でも議論を深めていただきたい。

【飯島委員】

教育の検討会というものは提言書 4 ページの(4)にもあるように、私たちが検討したものが「速やかに」私たちが検討した議論の内容を子どもたちに実施する必要がある。子どもたちはすぐ大きくなってしまふ。上田市の中でも先延ばしの問題がある。その問題と違って教育問題は子どもの成長に関わる問題である。成長する子どもたちのために、決まった問題は速やかに実施する必要があると思う。

【桜井委員長】

懇話会のなかでも議論した内容であり、タイミングを逃さないようなるべく早く対応するという話であった。

【関副委員長】

提言書 6 ページ(4)にある「信州型コミュニティスクール」についてだが、社会教育の中ではどう進めていくのか。そういった面も取り入れながら進めていただきたいと思う。

【桜井委員長】

私の記憶では、懇話会においては、「上田市として」「上田市ならでは」という議論が多かったと思う。何か特別なことでもなくて、上田で生まれて育て教育を受けて良かったなと思うような、押し付けではなく、地元の素材等から学び取るものが多くあるはず。特別な教育をやってもらうのではなく、普通に元気よく健康に健全に育ててもらうことが大事だと、懇話会であったと思う。私自身、その材料として上田市を使う。「上田を学ぶ」「上田で学ぶ」という意味で上田市ならではである。

【飯島委員】

附属資料を見ても、生まれた子どもはどんなに努力しても増えるわけがない。これから子どもを儲ける親たちに上田市が教育をしてくれるのなら、もう1人子どもを作りたいと思うような教育制度を作っていく努力が必要だと思う。今、少子化の問題で、何とかしてよそに住んでいる人たちを連れてこようとする動きが行政に多い。よその人を連れてくるだけでは何もならなくて、これから子どもを儲ける親たちが新たな子どもも儲けられるような制度の検討もお願いしたい。

【桜井委員長】

ソフト面もハード面も教育制度にぜひ掲げたいと思う。

【竹花委員】

5年の自習学習のボランティアで小学校へ入り、先生たちは本当にご苦労だと思った。コミュニティスクールもあるが、現場の先生方はどういう気持ちでやっているのか。学校の先生方のご意見も反映できればと思う。

【菊池委員】

子どもの1クラスの人数は以前よりも減っているが、多様化している。学校ごとにコミュニティスクールの中で地域の方にご支援をいただき、市からの支援員の方にも助けられている。学校の職員もさまざまに対応している。保護者の方と話をしていると、家庭教育、子育ての悩みを抱えている母親が多いと実感している。特に若いお母さん方は自分の子育てについて相談できずにいる。

【福澤委員】

現場で子どもたちを相手にしているのは職員なので、その声も大事にさせていただけるとありがたい。本校は中学校で地域との連携としてコミュニティスクールを行っている。放課後学習では地域の方に支えていただきありがたいと思っている。上田として、上田で上田を学ぶことは大事だと思うが、例えば上田学みたいなものを考えていければいいと思っても、今教員の働き方改革で、新たなことを始めるにはかなりの工夫が必要だと思う。以前にいた岡谷市の小学校では、新たなプロジェクトチームを作り、この学年ではこの地域素材を使ってなどとやってきた。それなりに負担もかかり、どのようにやっていけばいいのか考えていかないと仕事が増えてしまう。

【桜井座長】

昨年は今ほどの働き方改革の議論はなかった。背景がまた変わってきているのかと思う。現場の声でいえば、例えば発達障がいの方の対応、外国籍の方もそうだと思う。高校、大学でもそのことが課題になると思う。また、現場の先生についても、周りの社会の認識も以前より十分とは言えないが良くなっている感覚がある。不十分なところを先生方の研修の中で補っていく。現場の先生も努力している。現場の大変さと上田学の話で何かお答えいただきたい。

【中村委員】

働き方改革は非常に大切だと思う。学校は地域にあるが、地域から見ると非常に遠い。先生方は今まであまり地域活動に参加してこなかったと思う。働き方改革で今よりも時間ができたり、あるいは長期休暇があるときに地域活動に参加していただくと、地域にどういう人がいてということが分かる。どういう関わり方をしてもらえるのか。地域代表と話していけばスムーズに動くことがたくさんあるはず。先生たちは地域の人たちをうまく使えばいいと思う。先生たちが大変だということとは皆分かっている。何とか応援したい。そういう意味も含めて地域に溶け込んでほしい。

【桜井委員長】

新しい観点、これからの学校を作っていく大きな観点かと思う。PTAの立場から中川委員お願いしたい。

【中川委員】

役員になって初めて学校の先生と話をするようになった。PTAに関わっていないとなかなかできないことがある。子育てに悩む親はどこで相談したらよいのか、何かPTAでやってあげられることはないか。次年度の役員選びで汲々とする学校ばかりで、役員のなり手がいない。子どもが伸び伸びと学校生活を送れるようサポートするのに一番近いのは親である。親が学校とどういう関係を持つかが大事なところである。いい関係を持つためにPTAをうまく使ってもらえばいい。親と学校をどうやって結び付けるかを役員で考え、何か糸口があればと思っている。

【桜井委員長】

学校と周りの関わり方について、学校と地域を巻き込んで一緒に何かできればという思いではいるが、具体的にどのような仕組みで関係していったらよいか指摘されたかのように思う。地域とPTAと学校の関係の中で、学校が遠い存在であるとこの先うまく進んでいかない。いかに近くにするかが課題である。

【金井(律)委員】

武石は子育て支援として、子育てが初めての母親や経験豊富な母親が遊びにきて情報交換や悩み相談をする場所がある。深い悩みを抱えている親はそこに行くことができなくて難しい。反面、校長先生から指導員の先生やカウンセラーの方に親御さんがカウンセリングなどを受けて変わっていった話を聞いたことがある。そこは大切なところだと思う。コミュニティスクールを小学校、中学校で関わらせていただいているが、難しいところも多々あり、もう少し勉強していきたい。

【早坂委員】

コミュニティスクールは課題が多い制度の1つであるが、大きな可能性を秘めている。学校の先生が今持っている業務負担を少しでも軽くして、身軽な体で地域と関わってほしい。コミュニティスクールは多様な価値観を発展させられる可能性がある制度だと思う。この場でも私が知っている知識を提供しながら上田のコミュニティスクールをもっと輝くものにしたいと思う。

【関副委員長】

私に関わっている北小のコミュニティスクールは、地域の方と先生が1年に3回話し合う機会がある。先生たちの話を聞きながらいろいろと交流ができると思うが、先生の負担が増えてしまう。学校のことが分かってどう対応すればいいのかは、直接担当の先生と話ができる機会が大事だと思う。どうすればうまく進んでいくのかということも研究できればと思っている。

【桜井委員長】

新たな視点でいくつものご意見があった。

【中村委員】

提言書にかかれた「速やかに」はある意味でいろいろとやるには遅いと思う部分もある。もっと早くから議論されて当然であることは重々承知している。その中で、附属資料の中にあるハード面のことになるが、小中学校で 50 年を経過している校舎についてどのように話し合えばいいのか。多分個別案件は出ないと思うが、こういう方向性でいくとか、そういうようなところへ踏み込んでこの検討会の結論にしていかななくてはいけないのか。そういう重い認識でいいのか。

【石井教育総務課長】

タイミングとしてどうかという意見だと思うが、確かに改築が喫緊の課題である学校がある。あり方の結論を待たずに改築するケースもある。このあり方については慎重に進めていく必要がある問題なので、ここで基本的な方針が出たとしても地域に入っていったときにどのような形で進められるのかはまだ不透明である。全てこれによって進めるというのもどうか、分けて考えることも必要なのではと思う。

【中村教育次長】

学校については他の施設とは違って、単なる数合わせ、統廃合ありきではない議論であることは確かである。そうはいても、市の財政状況や上田市で策定した公共施設マネジメント基本方針があり、今後の学校について 35 の学校があるので、順次建て替えをしたとしても何年で建替えられるのか、それを踏まえた議論をしていく必要がある。単にハードのものではなく、中身もどうするのか議論も併せて行う必要がある。ハード面では難しい部分があるが、上田市全体の状況の話を申し上げるとともに、財政の状況も踏まえながら、施設についてどこがどうではない議論をしていかねばならない。

【桜井委員長】

どういう手順で進めるかが難しい。この委員会での議論の進め方がハード面のブレーキになってもいけないし、その逆でもいけない。現実に進められる方法をとっていきような考え方をしていただきたい。

【竹花委員】

提言書 3 ページ (3) 『「次の時代を創っていく力」が求められます』とある。この委員会を作っていただきありがたいと感謝している。子どもたちが新しい道を切り開いていける力をつけてほしく、そういう思いで議論していきたい。

【石井教育総務課長】

先ほど竹花委員からご質問のあった、附属資料 1 ページの児童生徒数の推移予測について訂正を

させていただきたい。表の上に記されているとおり、来年度以降の学級数は総数を単純に 35 で除して算出した参考値である。H31 年度以降については基本的に 35 までは 1 クラス、36 人以上になれば 2 クラスになり、単純な計算でクラス数を出している。西内小は H31 年度以降 5 クラスになっているが、この計算から行くと H35・36 は 6 クラスになる。

【桜井委員長】

今日はそれぞれの思いを出しあって、これからの議論の土台を作ればという意味でこの時間を取らせていただいた。これから会を重ねるごとにまとめて市の方に提案ができるよう進めていきたい。

○全員了承

9 事務連絡

(1) 第2回検討委員会について

皆さまから提出いただいた「日程確認表」をもとに調整させていただく。改めて本日欠席の委員の皆さまの分も含めて通知させていただきたく、ご承知いただきたい。次回の議論について、提言書の1・2より、上田市としてどういう子どもを育てたいのか、またその実現のために上田市としてどのような教育を行う必要があるのかから入って行ければと考えている。それぞれの考えをお持ちいただき、自由な意見交換の中から検討委員会として考え方を見つけ出していきたい。

(2) 第3回以降の検討委員会日程について

3回目以降については、新年度（平成31年度）に入ってから開催する予定である。

10 閉 会